

指 定 調 査 研 究

ヒラメ・カレイ類種苗生産試験

(要 約)

高橋 邦夫・小倉大二郎

1 ヒ ラ メ

- 1) 全長75cmの親魚から8回人工採卵し、約213万粒を得た。この間に自然産卵を観察しているので、この程度の大きさの個体では10回前後の採卵が可能であると思われる。また水槽内での産卵期間は、2個体についての観察では、それぞれ約2ヶ月間であった。
- 2) 親魚を冬季間屋内水槽で加温海水を注水して、海面水温より7～8℃高い水温で飼育したところ、自然の産卵期よりも2ヶ月以上早い3月下旬から産卵がおこなわれた。
- 3) 仔魚の飼育海水の塩分濃度を、全海水、 $\frac{3}{4}$ 、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ 海水の4区分として飼育し、全海水区が成長、歩留ともによく、 $\frac{1}{2}$ 海水までは70%内外の歩留で飼育できることが分った。
- 4) ふ化仔魚の密度を、20、40、60尾/ℓとして36日間飼育、生残率の推移から、より高密度の飼育が可能であると考えられる。
- 5) 仔魚の飼育適温は16～22℃位にあるとみられる。
- 6) 屋外コンクリート8トン水槽で着底直前の個体を、1,200尾/㎡、1,800尾/㎡収容して、全長40mmまで飼育した結果、歩留は、58.6%、31.8%であった。減耗要因としては、餌料不足もあげられるが、トビによる友食が想像以上に大きいことが推察される。
- 7) 250～300ℓの小型水槽で、着底後の稚魚を870～2,740尾/㎡の密度で飼育し、歩留90%内外の結果を得、カレイ類の5倍程度の密度で飼育できることが分った。
- 8) 着底直前の10.5mm内外の仔魚の餌料として、チグリオパスは効果が認められなかった。
- 9) 色素異常の出現時期について観察し、色素異常を形成する作用(要因)を着底以前に受けていることが推察された。

2 マ コ ガ レ イ

- 1) 仔魚飼育の過程で、シオミズツボムシからアルテミアに切替える時期を変えて色素異常個体の出現状況を調べた結果、アルテミアの給餌時期が遅れるほど色素異常個体の出現率が高い傾向を示した。

ただし、これまでの結果から、その要因は単純なものではないように推察される。

詳細は、昭和51年度、指定調査研究総合助成事業 ヒラメ・カレイ類種苗生産試験報告書 青水増資料S51-Ⅱ6 を参照されたい。